

宮崎汎会員が見た世界の旅第2部人物編第32話

カルタゴの名将ハンニバル チュニジア

子供の頃に読んだ冒険小説の一つに、カルタゴのハンニバル将軍が強敵ローマ軍を相手に戦う物語がある。象を引き連れて険しい冬のアルプスを超えてローマへ侵攻する場面は想像を掻き立てられ胸を熱くしたものである。以来カルタゴ・ハンニバルの文字は頭の中に刻み込まれ消えたことはなかった。

1981年、欧州出張の帰途日程をやりくりして、ハンニバルの故郷カルタゴのあるチュニジアを訪れた。チュニジアは先年アラブ諸国に吹き荒れた「アラブの春」の発端となった国である。また2022年8月にはTICAD8（日本政府の主導するアフリカ開発会議）がチュニジアで開催される。

首都チュニスの目抜き通りであるブルギバ通りは、緑の街路樹に覆われた広くゆったりした通りで



パレ・ド・オリエント

ある。旧市街のスーク（市場）の一角に、パレ・ド・オリエントという大きな土産物店がある。その屋上に上がると美しいタイルで彩られチュニスの旧市街を一望できる。また市内のバルドー国立博物館はモザイク画の収集でよく知られている。

チュニスからタクシーを借り切りカルタゴへ向かった。ハンニバルの活躍したカルタゴとはどんなところで、どんな遺跡が残っているのか胸をワクワクさせながら想像を膨らませた。

間もなく丘の頂に真っ白な建物が建て込む小さな町が見えてきた。

今まで見たこともない純白の家並みが続く、どの家も窓枠やドアは美しいブルーに塗られ独特の雰囲気醸している。この町はシディ

ィブ・サイドといい1979年に世界文化遺産に登録された。



シディブ・サイドのカフェナッド



純白の路地で出くわしたロバ

まばゆい太陽に輝く美しい町をうっとりとした気分で散策した。路地に迷い込み真っ白な壁に赤紫のブーゲンビリアのツタが這い、そこへロバに乗った親子が通りかかった。喧噪の東京に比べ浮世離れした異次元の世界をさ迷っているような心地となった。

1981年当時は、純白の町の中心には有名なカフェナッドがあり、その辺りにわずかの土産物屋

があるだけの静かな町並みであった。土産物屋を覗くと棚に並んでいたのは不器用な子供が作ったような、これ以上の粗悪品は無いと思うほどひどい出来のラクダの人形である。材料はぼろきれの



記念に買ったラクダの人形

ツギハギで、縫い目は荒く要するにひどい売り物であった。こんなものを誰が買うのかと思ったものだが、なぜか興が乗って此のラクダを土産に買ってしまった。

現在のシディブ・サイドをビデオで見ると、町のシンボルのようなカフェナットのある通りには沢山の土産物屋が軒を連ね観光客も沢山散策していて40年前とは大きく様変わりしていた。

シディブ・サイドは首都チュニスから30分足らずにある。そこからすぐにカルタゴの遺跡はあった。なだらかな丘に遺跡が連なっている。丘の上から海岸を見ると地中海がのったり波打ち、赤茶けたレンガ造りの遺跡らしきものが海岸に広

がっている。丘を下り海辺に出た。ここら一帯がフェニキア人の基地であり港であったとガイドから説明を受ける。



かつてのフェニキア人の都市カルタゴはローマによって破壊され跡地にローマは都市を再建した

現在話されているアラビア語・ヘブライ語・エチオピア語などはセム語族に属する。フェニキア人とは、西アジアから北アフリカに広く分布するセム語族の一派である。

フェニキア人のルーツは、現在のレバノン付近に住み付いたとされる。彼らは良質なレバノン杉を船に加工し海洋進出を果たし地中海貿易にのりだした。フェニキア人は海洋民族で優れた航海術を駆使して、現在のスペインやイギリスさらにはインド洋にも進出していった。そして各地に植民都市を建設していった。フェニキアの最盛期は紀元前12世紀～紀元前9世紀に及んだ。

彼らの残した文化遺産としてよく知られているのは、表音文字の発明によって現在のアルファベットの原型を作ったことである。

フェニキア人の本拠地は現在のシチリアあたりといわれているが、さらに地中海やアフリカ沿岸にいくつもの植民都市を建設して行った。その一つが現在のチュニジアに築いたカルタゴである。そしてカルタゴをベースとして地中海の制海権を握り海洋貿易国家として大いに栄えたのである。フェニキア人とローマ軍の戦争はポエニ戦争と呼称され、三度にわたる大きな戦いをした。

三度目の戦でローマ軍は大勝利を収め、フェニキア人の基地カルタゴを徹底的に破壊し尽くした。従ってカルタゴの遺跡らしきものは何も残っていない。その後紀元前44年ローマの将軍カエサルがカルタゴの地に新たに都市を建設した。目の前に広がる遺跡群はカルタゴというより、古代ローマ遺跡群なのであろう。

歴史に残るポエニ戦争はカルタゴとローマ軍の 3 次にあたる戦争である。ともに地中海の覇権をかけた負けられない戦である。(注) ポエニとはラテン語でフェニキア人のことである。

第 1 次ポエニ戦争は紀元前 261 年～紀元前 241 年。

シチリアを巡ってフェニキアとローマが戦端を開き、ローマ軍は海洋進出のための船を数多くつくり遂にはフェニキアに勝利した。

第 2 次ポエニ戦争は紀元前 218 年～紀元前 201 年。

勇将ハンニバルが勇猛を振るった時代。紀元前 218 年名将ハンニバルはスペイン植民地兵 9 万人を率い、さらに象を 50 頭引き連れ陸路雪のアルプスを越えてイタリア半島へ大遠征をした。イタリアの長靴の踵あたりにあるカンネーの戦いに勝利しローマ軍の本拠地ローマへ迫った。しかしハンニバルはローマ軍を打ち破りはしたがローマを陥れることは無かった。

そして以後 16 年間ローマ軍と戦ったが、一方ローマ軍の将軍スキピオはフェニキアの本国であるカルタゴを攻め、カルタゴの戦闘力を完全に奪い、さらにカルタゴの植民地スペインを奪う大勝利を得た。そしてローマは 50 年間にわたる巨額な賠償金を敗戦国カルタゴに課した。

ハンニバルは戦略に秀でた才能を持ちローマ軍と戦ったが、本国カルタゴの積極的な支援を得られず、遂には敗北を喫した。政治を左右しカルタゴを支配してきた貴族の持っていた権限を、ハンニバルが引き継ぎ、以後政治家としても大いに力を振るい、遂にはローマから過酷な賠償金を課されていたのにカルタゴは海洋貿易によって完済してしまった。

第 3 次ポエニ戦争は紀元前 149 年～紀元前 146 年。

カルタゴの賠償金の完済ぶりを見てこれは侮れないとローマは恐れ、カルタゴを攻め滅ぼすための様々な策略を巡らせた。カルタゴは堪忍袋の緒が切れて遂にローマとの戦端を開いたが力及ばずローマ軍に屈した。

ハンニバルはカルタゴからシリアへ亡命するも思い通りにはいかず、クレタ島へ、さらには黒海地方へ逃れるもローマ軍の追及は緩まず最後は自害によって自らの人生の幕を閉じた。

ハンニバルは紀元前 247 年カルタゴの将軍ハミルカル・バルカの長男として誕生し、軍人として指揮官としてさらには政治家として大きな存在感を示し世界史に名を残した。没年は伝えられるところによると紀元前 183 年 or 紀元前 182 年とされる。



ハンニバルが活躍した時代は日本の弥生時代にあたる。

一時代を築いたカルタゴの港のあった辺りは、今は静まり返り地中海の寄せては返す波音ばかりで、耳を澄ませてもハンニバルの雄叫びは聞こえてこなかった。